Ⅱ．水辺に寄せる思い

水辺こそ日本の都市の自由空間だった

陣内　秀信
法政大学　デザイン工学部　建築学科　教授

学生時代にヴェネツィアに留学したことが切掛けで、私は長年、世界の「水の都市」の比較研究をしてきたが、調べれば調べるほど、日本の都市における「水」のもつ役割、機能、意味の多さに驚かされるのだ。

東京にしても、大阪にしても、かつては網目のように水路が都市を巡り、様々な種類の舟が行き交い、水上にも、川や掘割に沿った水辺にも、賑わいが溢れていた。江戸時代には、都市の流通はもっぱら舟運に依存し、至るところに設けられた河岸で荷揚げが行われ、市場も水際に発達した。舟が行き交う状況は実は、近代にも受け継がれ、昭和の戦前まで続いた。

日本らしさの一つは、水が宗教・儀礼・祭礼とも密接に結びついていることだ。また、芝居が元々河原で生まれたことに象徴されるように、芝居小屋の多くは水辺に立地し、金持ちは舟で芝居見物に出掛けるという文化も生まれた。水辺に誕生した信仰の中心、神社仏閣はやがて、人を引きつける名所、行楽地となり、遊里の機能もしばしばもった。

また、日本の都市文化にとって欠かせない「盛り場」も、ほとんど必ず水辺に発達した。江戸の両国広小路（図１）、京都の四条河原町、大阪（大坂）の道頓堀、博多の中洲をはじめ、全国各地にその典型例を見てとれる。

図１　歌川貞房「東都両国夕涼之図」

このような水辺で遊ぶ伝統は、比較的最近まで存在した。東京・柳橋の花街では、1960 年代初めに、高いコンクリートの防潮堤ができるまでは、各料亭は隅田川の水際に自前の船着き場をもち、船宿から呼んだ舟で漕ぎ出し、隅田川を向島の方へ上って、納涼を優雅に楽しんだという。

日本には、ヨーロッパ都市のような市民が集まる公共空間としての広場が発達しなかった代わりに、日常の秩序から解放され、人々が集い、楽しみ、エネルギーを発散する自由な場としての、公共的性格をもった様々な空間が水辺に生まれ、都市を活性化させていたのだ。ヨーロッパの水辺のような立派な建築が連なる見事な水景はなくとも、民衆のエネルギーに満ちた営みが展開される猥雑さと色気をもった場所が、多彩な形で形成されていた。日本人が好きな自由な空間、都市の広場は、水辺に存在したのだ。

＊

このような世界に類例のない日本の都市の魅力ある水辺文化は、この国の川の特殊な事情からもたらされているのを忘れてはならない。川が急流で、しかも集中豪雨、台風も多い自然条件のもと、我が国では、洪水や高潮からいかに守りつつ、水を活用するかに知恵と技術を発達させてきた。治水と利水のバランスが肝要だったのだ。

図２　お台場海浜公園での海中渡御

水が怖いからこそ、畏敬の念も生まれ、水辺に神社を祀り、安全と同時に豊漁、豊作を祈る心性が育まれ

た。こうして物理的にも精神的にも水の脅威から守りながら、水の恵みをおおいに享受したのが日本の文化なのだ。特に、水と運命をともにする漁師の居住地が都市の近くに存在し続けてきた意味も大きい。そこには水と結びついた神社があり、祭礼を盛大に催し、海中渡御や水上渡御が行われてきた（図２）。

＊

これほど特徴ある水の都市の文化を築き上げてきた日本なのに、近代になると、徐々に舟運が廃れ、工業化、都市化で水が汚染され、1960 年代の高度成長期、その悪臭が耐えられない状態となった。水辺は 20 世紀の負の遺産と化した。建物は水に背を向けた。水辺は人々の関心から遠のいた。

それと並行して、治水事業が積極的に進められ、洪水、高潮から人間の命を守るための高い堤防がつくられ、その結果、川と人々の暮らしは完全に遮断された。

そして今、時は巡り、社会の価値観が大きく転換し、水辺を人々の手に取り戻す絶好の機会が到来している。だが、しばらく続いた水離れの時期に、日本の水の都市の根底に本来、備わっていた水と巧みに付き合い、水辺を多彩に利用し、そこに賑わいを生んできた前近代社会ならではの仕組みが、近代的制度・法体系、管理体制のもとで否定され、完全に忘れられ、水辺都市を営むノウハウが長らく不在の状態になってしまった。水辺に店も出せない、舟も使えない、水際には手摺りだらけ、といったがんじがらめの状況が続いた。

今、それを再び、現代の新しい価値観のもとで、未来に向けてつくり直す時期に来ている。そのためには、先ずは、日本の水辺の歴史的な経験から学ぶことが重要だ。欧米よりはるかに深くて多様な感性、技術、知恵、遊び心があるはずだ。同時に、近代にも水辺を否定せず、衰退し荒廃した空間を粘り強く再生してきた欧米諸国の先進的な事例から大きなヒントが得られるに違いない。

欧米では、１９７０年代に始まったウォーターフロントの再生、再開発の動きは着実に進展し、90 年代以後、さらに大きな成果をあげている。この間、私はアムステルダム、ビルバオ、ジェノヴァ、マルセイユ、そしてイギリスのロンドン、リバプール、アイルランドのダブリン、米国のニューヨーク、ボストン、ローウェルなどを訪ね、水辺に商業、観光ばかりか、住宅、オフィス、文化施設を複合させた新たな都市空間が創られている興味深い事例を見ることができた。クリエイティブな産業が水辺に進出し都市の現代的な活力を生んでいる様子、既存の倉庫、産業施設を活用したアートの活動の場が文化発信の中心となっている場面を各地で見てきた。どこも行政がしっかりイニシアチブをとり、ヴィジョンを描き、民間とコラボレーションを組んでダイナミックに再生事業を展開しているのが印象に残る。

水辺こそ、住むにも、働くにも、楽しみ寛ぐにも、文化を創造するにも格好の場所だという発想が、欧米の都市には着実に生まれている。

＊

ロンドンが一昨年、世界にその水辺の素晴らしさをアピールしたのを思い起こしたい。エリザベス女王即位６０周年記念のテームズ川を舞台とした華やかな船のパレードが話題になり、夏には、ベッカムが聖火リレーのため、テームズ川を格好よくボートで走った画像が我々を魅了した。こうしてロンドンは、「水の都市」のイメージを世界に鮮やかに発信した。

しかし、その背後には、都市づくりの大きな戦略があり、１９８０年代以後、ロンドンは段階を追って、そのイメージアップを見事に成し遂げてきたのだ。２年前の今頃、私は久しぶりにロンドンを訪ね、水辺を視察し、そのことを実感していた。産業革命とともに、テームズ川の川下に建設されながら、その後の物流の変化で完全に衰退、放棄されていたドックランドが新たな都市空間として蘇ったのは有名な話だが、旧市街地を取り巻く、やはり１９世紀に物流ルートとしてつくられ、その後、忘れられていたリージェント運河も見事に再生され、歴史的な船が行き交う文化、観光の水辺空間として親しまれている光景を見て、感動を覚えた（図３）。船で暮らす人々が、ロンドンのような大都会に大勢いるのを知ったのも、驚きだった。

図３　リージェント運河の中心 カムデン・ロック
水辺に若者が集まる

テームズ川は工場や物流機能も多く存在し、日本の河川とも似ている。その川沿いの空間が、ロンドンでは現代的なセンスで蘇り、人々を惹きつけているのだ。火力発電所はテートモダンの現代美術館にコンバージョンされ、その上からは水の都市、ロンドンを一望できる。川に沿って歩くルートが整備され、水辺散策を楽しめる。水上バスは、観光というより通勤の足として活用されている。すべて、時代を先取りする都市の政策がそれらを実現してきた。

一方、日本の都市、例えば東京はどうだろう。神田川−日本橋川−隅田川のループは世界に誇る水の空間だが、その最大の目玉、お茶の水渓谷には、船の姿はない。船着き場は沢山できているが、防災船着き場と呼ばれ、実際にはあまり使われていないことが多い。川や運河沿いに、まだまだ美しい建築が少ない。水辺の照明も工夫されていない。水辺の象徴的な公共建築はほとんど皆無である。

今こそ、「水の都市」再生・創造のための大きなヴィジョンを描くことが必要だろう。川、掘割・運河、海という多様な水空間をもつ東京や大阪。その水辺の未来へ向けての可能性は、パリやロンドン以上にあると思われる。その可能性を見抜き、活かす都市の優れた政策立案能力や、時代を読む都市の経営戦略が求められている。

同時に、我々都市の生活者が、水辺を楽しむセンスを取り戻し、さらに磨きをかける必要があろう。アジアの都市も水辺の魅力を増している。シンガポールの水辺の夜景は絶品だし、上海の水辺が近年、魅力を高めている。2010 年の上海万博を見に行ったが、黄浦江に沿った外灘（バンド）の水辺にも、対岸に実現しつつある巨大未来都市、浦東地区の水辺の公園にも、夜、大勢の人々が繰り出し、美しい夜景を楽しんでいる光景には、感動を覚えた。

日本にも、最近では素敵な水辺が沢山整備されているが、人の賑わいがまだ不足している。京都の鴨川の水辺に熱々カップルが並ぶような情景の現代版は、まだ少ない。本来は、水辺にこそ、日本の都市の自由空間があった。その水辺を使い倒すたくましさを人々の間に蘇らすことが必要だ。

水辺の復権は、我々自身が水辺をとことん楽しむことから始めたい。

BOAT と水辺と公共性の関係

井出　玄一
一般社団法人 BOAT PEOPLE Association　代表理事

いきなり白状しますが、子供の頃から船が好きでした。なぜかはよく判らないのですが、暇さえあれば船の模型を作ったり、船の雑誌を読んだりしていました。小学生の時に自作のイカダを作り、相模湾に漕ぎ出したこともあります。（30分程で戻ってきましたが）。ちょっとはずかしいのですが「世界の艦船」という専門誌を定期購読していたこともあります。

中学生の時にディンギー（小型ヨット）に乗り始めました。大半の友人は競技に向かったのですが、競争には全く関心がなく、ただ水面を自由に移動することに快感を覚えていました。

社会人になってしばらくして、東京の芝浦の運河で水上ラウンジLife On Board（LOB）をオープンしたのもそんな流れに沿っていたと言えます。東京の裏町を流れる運河、鉄製の旧い貨物船、自由に使える浮かぶ空間。ここに自分たちの居場所を作ったら面白い、と直感的に思いました。2年くらい続けるうち、いろいろな人が船に集ってきました。週末は満員になり、人が溢れました。LOBで面白かったのは、見知らぬお客さん同士（非合法バーだったため営業許可はなく、正確には“知人”ですが）がしばらくすると打ち解けて一緒に飲んだりしていたことです。思い出すだけでもLOBで出会い、結ばれたカップルが5組ほどいました。“呉越同舟”とはこのこと、もしかしたら船には自然に人と人を繋げてしまう機能が備わっているのではないか、と思いました。LOBは東京でも知る人ぞ知る、ちょっとした「場」になっていました。都市と水辺の関係に強い興味を持ったのもこの頃です。当初、私とBOATの関係は非常に個人的で、あくまで趣味的なものでした。

そんな中、LOBが役所から目を付けられて閉鎖せざるを得なくなりました。いろいろな事情がありましたが、水辺には目に見えないさまざまな法規制、業界団体、商慣習などいろいろな要素が絡み合ったじつに複雑な世界があることに気付かされました。一見自由だと思っていた水辺は、じつは極度に閉鎖的な空間だったのです。それに気付いた後は、役所の言うところのいわゆる「公共性」と「個人の楽しみ」というコンフリクトの中に身を置くようになりました。それは一見水面の問題に見えますが、じつは現代の日本に暮らしている私たちの共通の課題だとも言えます。

公共性は日本の水辺では非常に難しい問題です。水辺は、私たちが学校で教わった民主主義、国民主権、国民＝公共、といった価値観とは明らかに異なる論理で廻っているように見えます。これまでの経験から大まかに言えば、水辺のメインプレーヤーは少人数の関係者（業界団体、有力企業、地権者など）に限定されています。役所（この場合は東京都）との二人三脚で、旧い慣習に則って運営されています。そこでは水面の利用者である私たちの意見が反映されることはまずありませんでしたし、むしろ多くの場合、我々の申請

旧い貨物船を改造した水上ラウンジ LOB。無許可で 2000 年から 2 年間だけオープン。東京湾の運河をさまざまな人に楽しんでもらった。

LOB のラウンジ。内装はすべて手作り。照明はロウソク、冬の暖房は薪ストーブで。開閉式の屋根を開けると夜空と頭上を行くモノレールが見えた。

や請願は「公共水面の公共性が担保できない」ことを理由に却下されてしまいました。

しかしいま、日本の水辺は大きく変わるチャンスです。もし本当に変わることができれば、日本の豊かな水辺は世界の人を魅了することになると思います。これからの水辺は「アート」「異文化」「食」「スポーツ」さらには「色気」といった個人の楽しみを価値の中心に据えてゆくべきと考えます。これらは本来水辺と相性が良いのに日本の水辺では長らく封印されてきました。しかしいま、解き放つ時が来ています。一方、間違っても大量消費型、大資本一辺倒の水辺にしてしまうのは避けた方がよいと思います。そこで提案ですが、しっかりとしたビジョンを持つ水辺利用者、アーティスト、経営者、企業人、役人などが集結できる場所（できれば水辺に）を設け、課題を設定してディスカッションを開始すべきです。（本懇談会のようなものを継続的に行っていくというのもありだと思います）。また活動を継続的にするためにもスモールビジネス（飲食店、お店、イベントスペース、スポーツクラブ、スクールなど）との組み合わせは必要でしょう。また船が着ける桟橋があれば最高です。そこで具体性の高い水辺の活性化策を役所と一緒に立案、提案してくというものです。

ところで、この文章を読んでいる水辺関係の役所の方（ぼくらの場合はおもに東京都ということになりますが）にお願いしたいのは、なるべく早く水辺の公共性の定義を広げる方向にシフトしてもらいたいということです。なぜなら、もはやこれほど多くの人々が水辺に注目を集め始めている中、これまでのような狭義の公共性は水辺利用者の利益に相反するだけではなく、巨大地震のような非常時の水辺利用をも妨げてしまっており、長期的な水辺の安全性と利活用を低下させています。反対に、たった一人の反対者のために良質のイベントが行えない、というケースもあります。こうしたことも踏まえ、もはや少数の関係者だけでは水辺の活性化は無理です。そこで利用者のパワーを最大限に生かしながら公共性を広げるためにも、利用者と行政との調整を行うコーディネーターを置く必要があるのではないでしょうか。またそこにはしっかりとした役割と権限を持たせることが重要です。たしかに安全性の担保や訴訟時のリスクをどうするかという問題は存在します。しかし、大阪は現実にそういう方向に動き、安全上の問題もなく大きな成果を収めつつあることを今回の懇談会で学びました。大阪ができるのに東京ができなかったらちょっとかっこ悪いと思うのですが・・・そして何より、次の世代に楽しくてリッチな水辺空間をプレゼントしませんか？

最後にやや逆説的なのですが、閉鎖性ゆえに東京の水辺は世界の都市の中でも非常にユニークで面白い空間になっています。この状況を逆手にとって世界にアピールすることも十分可能だと考えます。ただ、今度はぜひ合法的にやりたいものです。

夏の日の夜に隅田川に大型カヌーで漕ぎ出してみる。普段は気付かなかった同僚のしぐさに思わずシャッターを切る若手サラリーマン。夜の水辺は女性の色気を引き出す？

水辺を使いながら都市の未来をつくりだしていく

伊藤　香織
東京理科大学　理工学部　建築学科 准教授

１．水辺は財産

「水辺は都市の財産だ．水辺を持つ都市は，そのことに感謝し，水辺を活かした都市づくりをしていかなければならない.」

これは，私がストラスブール（フランス）の市職員から聞いた言葉である．たしかに，都市を代表する印象的な景観を水辺で作り出している都市は少なくない. よく知られているのはシドニー（オーストラリア）だろう．陸地に深く切り込み複雑な水涯線を描くシドニー湾のひとつの岬に，風をはらんだヨットの帆のようにコンクリートシェルを広げたオペラハウスの姿は，シドニーを代表する都市景観として誰もが思い浮かべるものではないだろうか．オペラハウスから連なる入江部分にはオープンテラスのバーやレストランが並ぶ．オペラがはねた後にプロムナードをそぞろ歩き，入江越しにオペラハウスを眺めながらレストランで余韻を楽しむのが，都市生活の一部なのだ．

水辺は都市にとって特別な場所だから，たとえばドレスデン（ドイツ）でもコペンハーゲン（デンマーク）でもオペラハウスは水辺にあり，幕間にはシャンパンを片手に水辺を眺める人たちでホワイエやテラスが華やぐ．コペンハーゲンでは，水上バスでオペラハウスを訪れる人も少なくない.

視覚を遮るものがない水辺は開放的で，対岸や船上からは水辺の建築や都市景観を一望することができる．ボルドー（フランス）では，倉庫の立ち並んでいたガロンヌ川河畔を公共空間として整備したことで，18 世紀の壮麗な街並みと近代的な LRT（新型路面電車）の織りなす都市景観が一望できるようになった.「水の鏡」と呼ばれる河畔の薄い水盤は人々で賑わう．川辺を散歩してベンチで新聞を読む日曜の午前中に，LRT で橋を渡りながら水の鏡に映るブルス広場を目にする夕方に，この都市に住んでいて良かった，と感じる瞬間が日々の中でどれだけ増えたことだろう.

２．都市再生の現場

近代になって水辺が工業と輸送の現場となり，モータリゼーションが進んで水辺に自動車道路が通されると，都市の水辺は人々の生活から切り離されたが，産業構造の変化に伴ってうち捨てられた時代を経て，都市の水辺は都市再生の現場として再び脚光を浴びることになった.

前述のボルドーの水辺もそうした流れのなかにあり，横浜や門司など国内にも多くの都市が見られる．ニューカッスルとゲイツヘッドは，造船業と炭鉱業で栄え急激に衰退した英国の典型的な工業都市であったが，1990 年代後半からは両市の間に横たわるタイン川が「文化による都市再生」の中心地となった．≪回転≫する歩行者橋，古い工場をリノベーションした現代アートセンター，ガラスの三次元曲面を描く音楽ホールが次々と整備されただけでなく，生まれ変わった川辺をアートプログラムや文化的イベントで使い倒し，世界の先端的な創造都市として注目を浴びた.

モータリゼーションの進展に伴って，暗渠化され幹線道路となった川も少なくない. オーフス（デンマーク）のオーフス川もそのひとつであったが，1990 年代に中心市街地の交通計画見直しとともに開渠化された．再び姿を現した川の両岸は歩行者専用道となり，オープンレストランが建ち並んだ. 川岸の一部は緩い階段状の広場になっており，潮位によって広場が現れたり水面下に消えたりする. 観光客はオープンレストランで食事を楽しみ，若者たちは広場に座っておしゃべりに興じる

.

ガロンヌ川河畔の「水の鏡」（ボルドー）

（Nicolas Mirguet, CC BY-NC 2.0 www.flickr.com/photos/scalino/）

再び開渠化されたオーフス川（オーフス）

（写真：前島彩子）

３．水辺のリテラシー

こうして見ていくと，都市の水辺を魅力的にしているのは，美しく整備された都市空間とともに，それを使いこなす人々の生活であることがわかる．

セーヌ川河畔にビーチを出現させるパリ（フランス）のプラージュは，ヨーロッパのあちこちに広がりを見せているし，日本でも京都で伝統的に続けられてきた川床に倣って，民の力で規制緩和の進む大阪の水辺でも川床を楽しめるようになっている．東京でも社会実験が始まった．

ベルリン（ドイツ）では，シュプレー川に艀を浮かべてプールを作っており，川で泳いでいるような体験ができる．水質汚染が進む以前の川と都市生活との関係を取り戻そうとする試みだ．プールと岸を繋ぐデッキは，夏にはビーチとなり，冬には膜で覆われてラウンジとサウナになる．コペンハーゲン（デンマーク）でも川の中にプールが設けられ，好評を得てその数は増えている．

それぞれの場所に根付いたそれぞれの水辺の使い方がある．水と共に生きる郡上八幡では，今でも用水を使ってスイカを冷やしたり，洗い物をしたりする．水の流れも使い方もバリエーション豊富な美しいまちだ．長良川支流の吉田川では，高さ 12 メートルの橋から中高生が飛び込む．不慣れな人の飛び込みで重大な事故が起こったこともあるが，このまちでは儀式のようなものらしい．少年たちはリスクを知り水の流れや淀みの読み方を学んで大人になる．

せせらぎのまち三島では，大人も子どももどんどん水に入っていく．魚を捕る子どもたち，スカートをたくし上げて遊ぶ中学生，水に足を浸して読書する女性．川の中を延々と飛び石や木デッキが連なり，地下だと思われたカフェはせせらぎに面した特等席だ．川レベルに下りると，道路レベルとは異なる人々の豊かな営みが展開している．

水都・大阪の人々は，川を船が通ると必ず手を振るようだ．土佐堀川で船に乗った私は，橋をくぐるたびに橋の上から手を振る人たちがいるのを感心して見ていたが，近くの席に座っていた女性 2 人組が「東京の人は船が通っても手ぇ振れへんらしいで」と話しているのが聞こえて，ああ，これが大阪の作法なのだと納得した．大阪は陸地と水上がコミュニケートする都市だ．

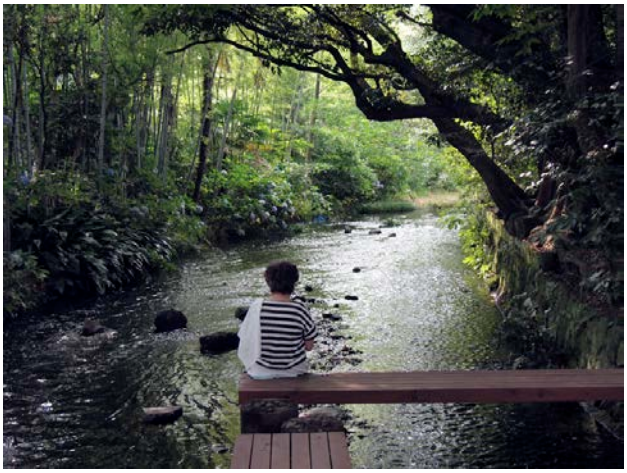
皆，それぞれの都市がもつ「水辺のリテラシー」を育み，水辺を使いこなしている．

４．使いながらつくっていく

私たちが 2002 年に東京ピクニッククラブを始めた頃，東京の不自由な公共空間や公園を変えたいと思っていた．その思い自体は変わらないが，次第に使い手の想像力・創造力の貧困さも目に付くようになった．管理の硬直化と使い手の創造性の欠如は表裏一体なので，まずはピクニックを通して使い手の創造性（ピクニカビリティと呼んでいる）を引き出していこうと，少し活動をシフトした．当事者意識とリテラシーをもって，自分なりに場所を開拓して創造的に使おうとする人が増えると，空間も豊かになっていくのだ．

私たち自身は「その都市らしいおもしろい風景」とそれを眺められる「居心地の良い空間」の組み合わせを見出しながらピクニックをする．水辺に特化しているわけではないが，東京では自然と水辺のピクニックが多くなる．東京の水辺はおもしろい．江戸からのインフラ整備の重層する歴史と，その向こうに見える現代都市の活動．それを眺めながら飲むワインは最高だ．ピクニックをしていると，「あると良い」ものも見えてくる．駅から遠いから船で乗り付けられるといいな，とか，氷と熱湯を提供する場所があればもっと身軽に行けるのに，といった風に．自分たちで楽しんで使いながら，未来をつくっていく．水辺にもそれが求められているのではないだろうか．

シュプレー川の中のプール（ベルリン）



せせらぎに足を浸して読書する女性（三島）

水辺を変えるお金のしくみを考える

金井　司
三井住友信託銀行　経営企画部　理事・CSR 担当部長

流れる川を見るのが好きだ。中学の時、毎年 10.6km の土手を走る大嫌いなマラソン大会をサボらずに完走したのは、眼下に広がる２つの大河が交わる様が息を呑むほど美しく雄大で、それが見たかったからである。

大学時代、高層ビルの最上階に登って独りでよく大阪の街を眺めた。夕暮れ時、沈む夕陽に反射して無数の川面がきらきら煌くのを見て、上田正樹の「悲しい色やね」を思い出した。川は人を感傷的にする。

会社に入って英国に赴任し、仲間を集めて船上パーティーを企画したことがある。テムズ川に映るロンドンの夜景を肴にシャンパンを飲み、騒ぎ、最高に楽しい一時だった。川は人の心を浮き立たされる魔力も持っている。

川のことなど何も知らない自分が、無謀にも「水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会」にコメンテーターを引き受けたのは、単に川が好きだったからだ。「水辺の魅力を生かした街づくり」なんて考えただけで心が踊る。大したことは言えないだろうが、学んだことを仕事に活かすことでそうした街づくりへ貢献できるかもしれない、そんな気持ちから参加した。

それでも少しは予習しておこうと思い立ち、江戸東京博物館に行ってみた。展示された絵図を観て東京に流れる川の歴史を学び、江戸時代の神田上水の高い技術に感嘆し、復元された日本橋を体感した。たまたま開催していた大浮世絵展ものぞいたが、川辺りを舞台とした構図が実に多い。江戸の文化が川を中心に花開いていたことは一目瞭然で、例えば鳥居清長の３人の貴婦人が隅田川の川辺りを涼しげに歩く「大川端夕涼み」という作品は、当時河岸が社交場であったことを伺わせる。

鳥居清長「大川端夕涼」
／大英博物館蔵（大浮世絵展公式サイトから）

浮世絵を堪能した後、博物館を出て両国国技館の横を通って隅田川まで歩き、堤防を降りた。そして川辺りのテラスをしばらくブラブラしたが、どうも何かが変だ。まず、防潮堤が街と川を完全に遮断しているため、異次元の空間に舞い降りた感じがする。両岸のカミソリ堤防はまるで水を流すだけの巨大な樋の側面のようだ。第一、隅田川の流れに中学の時に心を打った大河の悠久さを感じない。それに河岸にびっしりと無機質な建物が立ち並ぶような川にクルーズ船を浮かべても、テムズ川のようなワクワクするような船上パーティーを開けるとは思えなかった。予習するつもりで行ったのに、東京の川に創造的な街の未来を期待するほうが無理なのではないかと考え込んでしまった。

しかし、コメンテーターの皆さんの意見に耳を傾けるうちに、少し安心してきた。川のプロたちは、そんなこと百も承知なのである。困難だからこそ突き抜けた発想でブレークスルーしていくしかない、と腹を括っている。「ははあ、だからこんな変わった人達を集めたのか」と腑に落ちた。実際、懇談会は刺激的な言葉が飛び交う空中戦のようだった。しかし、毎回本質的な議論が繰り広げられた。

だとすれば、銀行屋の役割は決まってくる。お金の流れを作ることだ。財政赤字に喘ぐ今の日本において、国に多くは期待できない。しかし、何しろ個人金融資産が 1,600 兆円もある国なのだ。民間の資金を上手く引き出す仕組みができれば、有効な資金調達手段ができるかもしれない。

民間資金の仲介については、クラウドファンディングなども登場しているが、まとまった資金を継続的に調達するには、金融機関を動かさないと始まらないだろう。それには、プロジェクトのリスクとリターンを分かりやすい形で示し、リスク許容度に見合った金の出し手を見つけてこなければならない。おそらく、水辺の再興は銀行や投資家が丸ごと負えるリスクではない。行政や事業者との間でリスクをシェア（分散）する仕組みが必要になるだろう。

ところで、素人なりに水辺の街の再興を考える上で、第一回目の懇談会は大変有意義だったと思っている。この時は、浅草船着場から国交省の災害対策船「あらかわ号」に乗船し、最初に聖路加病院近くの船着場まで隅田川を下った。それから東京湾を回って荒川に入り、上流まで遡って赤羽の近くの岩渕水門の付近で下船した。

川から見る陸の風景はまるで違う。このクルーズが良かったのは、河岸の風景が多様性に富んでいると実感できたことである。隅田川沿いでも「絶望的な気分」に陥った両国のように建物がひしめくところばかりではなく、大川端リバーシティのような親水空間が広がったエリアもあった。また、荒川を遡ったURの「ハートアイランド新田」あたりは緑も多く、水辺を生かした街づくりは、コンセプトから違ってくると感じた。

川は人に賑わいをもたらすが、多様な生物を育む場所でもある。欧州では近年、グリーンインフラという考え方が注目されてきており、都市においても周縁部の自然を回復させ、街全体の生態系サービス機能を高めようという動きがある。それはまたポーランドのロッツの例に見られるような魅力的な住環境も創り出している。

ポーランド・ロッツ（提供：日本生態系協会）

一方、本懇談会における「主戦場」は、商業ビルやオフィスルビル、マンションなどが密集する下流域だろう。このエリアで大規模な再開発は困難である。水辺の街の再興を図るなら、既築ビルのリノベーションを中心に据えるしかない。街づくりのグランドデザインを示し、それに沿った改修を促し、水辺の賑わいを取り戻すことへの賛同者を増やしていくしかない。仕切り役が必要かもしれない。隅田川に近い複合ビル「両国シティコア」は東京都の土地信託物件だが、毎年、近隣の商店街を巻き込んで「大江戸・両国伝統祭」を開催している。こうしたランドマークビルは、街づくりの情報発信基地になり得る。

また、言うまでもなく、商業施設や集合住宅は、川の魅力が訴求できれば集客や入居につながるので、それ自体が経済的なインセンティブになる。故にそのために必要であれば規制緩和も検討すべきであり、場合によっては「水辺ラベリング」制度や補助金制度の導入も検討に値しよう。

余談ながら米国のグリーンビル認証制度 LEED を取得した建物の経済性は、働く人の知的生産性の向上や健康増進が最も大きいと報告されている。川と親しむことで社員がリフレッシュし、ハリバリ働いてくれるなら、川沿いのオフィスビルに「かわてらす」が広がってもおかしくない。

金融の仕組み作りについても、このように資産価値向上のストーリーが組み立てられれば考えやすくなるだろう。ただ今の段階では、しっかりとした事業者が運営し、安定的なキャッシュフローが担保されたプロジェクトでないと、金融機関はなかなか投融資に Yes とは言わない。その意味では、何らかの形で行政が関与し、プロジェクトの信用を補完するようなスキームを導入し、はずみ車を回し、すそ野を広げることが必要だと思う。

公共施設の建設や維持管理、運営を民間資金や経営能力を活用して行う PFI（Private Finance Initiative）などは、さしずめその代表格だろう。日本でも 2010 年に河川初の PFI 事業が利根川の佐原広域交流拠点で始まっている。このプロジェクトには地元地銀３行が協調融資で資金を提供しており、今後のベンチマークとなる取り組みだ。

行政が水辺の利活用の規制を緩和し、それとセットで河川の占有料を確保する仕組みを作り、借入の返済原資に充当するような形も考えられるかもしれない。但し、規制緩和（Deregulation）だけがグローバルトレンドではないことは知っておく必要がある。持続可能な社会を目指すためには、好き勝手を許さない規制強化（Reregulation）が必要な場合もある。

また、最近事例が増えてきた官民ファンドは、官がリスクマネーを投入し、民間金融機関の資金提供を促す仕組みである。不良債権問題が尾を引き、日本の金融機関はいまだにリスクテイクに慎重だ。「水辺の再興官民ファンド」などというのも使えるスキームかもしれない・・・・。

やはり銀行員の発想は真面目過ぎるなあ。どうも他のコメンテーターのように翔んだアイデアが思い浮かばない。でも、まあ、いいいか。このメンバーだから、堅苦しい少数派がいてちょうど良い。

そんなことより、川好きの一人として、これからもこのテーマにどう関わろうか考えている。

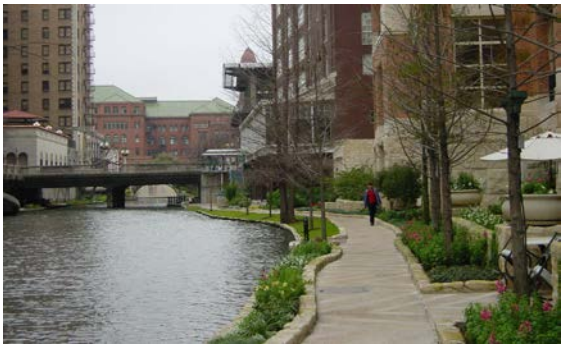
水辺のソーシャルデザイン

岸井　隆幸
日本大学　理工学部　土木工学科　教授

○先ず、水を綺麗にしましょう
汚い水に近づく気にはなれません。
綺麗な水が必要です。
今、川には下水が大量に流れ込んでいます。
だから、先ず下水道を変えましょう。
雨の日に汚れた水をそのまま川や海に流すのをやめましょう。
できるだけ綺麗な水にして川に戻しましょう

三島

○次に、河川と隣の宅地を一緒に考えましょう
水面と近くの宅地を合わせて水辺です。
両方が協力しなければ魅力的にはなりません。
今、川の計画・整備・管理をする人と、近くの宅地を利用する人は別々です。
だから、先ず仲良くしましょう。
自分のところだけで考えるのをやめましょう。
隣人に対する気配りと心遣いが必要です。
川の人は街の計画を見ましょう。
街の人は川のことを知りましょう。



サンアントニオ

○そして、水辺に近づける工夫をしましょう
魅力的な水辺は皆のものです。
誰でも自由に近づけることが必要です。
今、誰もが自由に使える水辺は限られています。
だから、工夫して皆の水辺を創り出しましょう。
川の隣に公園や広場を創りましょう。
川に沿って散歩道を創り出しましょう。
川と人を近づける工夫と知恵が必要です。

京都三条大橋　（明治 45 年　「日本写真帖」）

○川と街を結ぶ「水辺の駅と広場」がありますか？
鉄道にはかつて「民衆駅」がありました。
道路には「道の駅」が増えています。
今、川には皆の駅がありません。
だから、皆で「水辺の駅」を創りましょう。
桟橋ではなく、「水辺の駅と広場」を創りましょう。
もちろん駅には船がつくことが必要です。
そして駅には待つ時間を楽しむ空間が必要です。
駅には駅のわかりやすさが必要です。

○街から川が見えますか？
川は水と空が見えるオープンスペースです。
心地よい水面と空は皆が見たい風景です。
今、多くの建物は川に背を向けています。
だから、「川面を見せる建物」を大切にしましょう。
川面を見せる建物に集まりましょう。
多くの人に川を意識してもらいましょう。
見る人が増えれば川も変わります。

○楽しみながら水辺のソーシャルデザインを
水辺は私たちだけのものではありません。
子供たちに引き継ぐことが必要です。
今、水辺の魅力を引き継ぐ仕組みがありません。
だから、水辺のソーシャルデザインが必要です。
「皆の水辺」の「皆の約束事」を考えましょう。
皆で楽しみながら創り上げましょう。

ポートランド

○最後に、行政向けに行政言葉で書き下すと・・・

河川の「整備計画」を立案するときには、都市の将来像を確認することが必要です。
都市計画図を見て河川周辺の将来の土地利用を理解し、都市計画マスタープランを見て都市の将来の姿、目指すべき方向を考えましょう。

河川を「都市施設」として認識することが必要です。
「河川空間と他の都市施設・土地利用規制との関係」を意識するとともに、配置・計画・設計・利用・管理をできるだけ周りと一体的に考えましょう。

河川沿いの土地利用については、河川空間の特性を意識した地区レベルの約束事が必要です。
ボイドな空間の価値、河川空間へのアクセス、視認性、「見る・見られる」の関係を大切にしましょう。

河川の「親水性を高める」には水質改善が絶対条件、古い合流式下水道の「合流改善」が必要です。
河川区域の活用も含めて積極的に協力しましょう。

河川を「使いこなす」には河川・運河・港湾・用水路の垣根を越えて、舟運の制度・船着場の利用方法等を考え直してみることが必要です。
水辺の駅のあり方・管理方法等に挑戦しましょう。

水辺の「豊かな利用」を実現するためには、水辺に多様な役割を付与することが必要です。水面と陸域を合わせて取り込んだ条例管理の「水辺広場」と河川区域を重複させることは、兼用工作物制度や指定管理者制度の活用も含めて検討する価値があるように思います。

水辺の「粋な利用」を実現するためには、「公物管理の責任・公平性の確保」と「自由な利用」との折り合いをつけることが必要です。
エリアマネジメント組織などを活用して、「共の空間としての秩序と活力」を模索することは可能性があるように思います。

河川空間の価値を高めるにも、予算を獲得するためにも、「河川空間を重要な行政課題を解決するためにどのように使うか」を考えることが必要です。
そのためには、広い視野・高いアンテナ・柔軟な発想力を持った人材を育成しなければなりません。
河川部局と都市計画部局・企画部局との人事交流、行政組織を超えた人事交流、民間企業との交換人事が有効であるように思います。

水都大阪パートナーズの試み

忽那（くつな）　裕樹
株式会社Ｅ-DESIGN　代表取締役

１．大きなまちづくりと小さなまちづくり

まちの魅力はどのように育まれていくのだろうか。まちを歩いていて楽しく思えるのは、人々が生き生きとまちなかで活動している姿に出会ったときである。それぞれのライフスタイルに合わせて、まちを使いこなしている風景が、その魅力の原点であろう。

しかし、まちは産業の衰退などで地域に元気がないことや、複雑に絡み合った都市が、施設管理の視点でバラバラに構築されていて、人のための心地よい居場所を失っている。また、都市再生や魅力づくりについて知る機会がなかったり、一方通行で提供されていて、まちに関心が持てないこともある。こうした魅力的な活動が生み出されない状況では、まちの再生と魅力づくりはおぼつかない。施設づくり中心ではなく、持続的な環境づくりとコミュニティ活動をバランスよく連携して、同時に進めていかなくてはいけない。必要なのは、まち全体を一体的に捉えてつなぎとめる戦略をもつ「大きなまちづくり」と、地域の魅力を市民みずからが育んでいく「小さなまちづくり」を共有して、相互補完的に展開することなのである。この二つは、行政の単年度予算編成や縦割りの弊害、市民コミュニティの意思決定のあいまいさなどから一体的に構築していくのは難しく、新たな公共なるものが中々芽生えないジレンマを抱えている。「大きなまちづくり」では、安心・安全をその基本に置きつつ、環境に対する意識の高まりから、都市づくりのあり方が改めて問われている。また、新たな成長戦略が議論される中、観光をはじめとする地域独自の戦略をもち、都市間競争に打ち勝っていくことも必要とされている。この産業構造の変化を踏まえた再生のシナリオを担い、実感をもって育んでいく担い手は誰なのか。「小さなまちづくり」を育んでいく人々が、責任を持ちつつ、アイデアを結集して共に行動する以外に方法はない。まちづくりの担い手が連携しながら、そのプロセスに深く関わり、まちに愛着と誇りをもてるしくみもつくっていく。都市づくりの壁を超えるきっかけがここにある。

実現していく場として、公園や河川、道路などの公共空間、すなわちオープンスペースへの関わり方を変えていくことが有効であろう。自らが主体的に関わって公共の場所の魅力を高める。行政に管理を任せて陳情やクレームだけを言うのではなく、その場所のあり方の提案、管理、経営、という、マネジメントを行っていくのである。それらをネットワークさせ、競争と協働を模索し続けることが肝要である。まちに点在するオープンスペースを使いこなす魅力的な姿があり、それらがつながってくるときに、まちは再生の道を歩んでいける。

２．水都再生に向けた新しい取り組み

これらを踏まえて具体的な活動を行っていくために、一般社団法人水都大阪パートナーズを立ち上げて取り組みをはじめている。水辺を中心としたまちづくりの新しい模索である。設立経緯を含め、ここで紹介したい。

「水の都」大阪は、まさに水と共にあり、災害とも戦いながらその魅力を高めてきた。江戸時代に掘られた堀川に舟運が発達し、水辺には遊興などの文化が花咲き、まさに、環境と共にある使いこなしの風景が広がっていた。近代においても経済発展とあわせて美しい都市づくりが行われていた。しかし、陸運への移行や河川の汚染などにより、徐々に川に背を向けた都市計画が推し進められてきた。また、地下水のくみ上げによる地盤沈下などの影響もあり堤防が築かれ、川とまちはついに分断されたのである。「水の都」大阪の河川に人は近づかなくなり、水辺の使いこなしもまた、見られなくなり、まちの魅力は失われてきたのである。

このような状況から大阪を甦らせるために、2001 年 12 月、国の都市再生本部において、第 3 次都市再生プロジェクトとして「水都大阪」再生が決定された。それを受け 2002 年 10 月、水の都大阪再生協議会が設立され、大阪市域の約 1 割を占める河川を活用しながら、新たな景観づくりやにぎわいづくり、環境づくりに努め、水を活かした新たな都市魅力を創出し、大阪都心部の再生につなげていくことになったのである。

先行するかたちで、道頓堀川、堂島川、土佐堀川、木津川、東横堀川という、ロの字につながる水の回廊の船着き場や遊歩道が計画、整備され、水辺に近づける都市づくりの取り組みが進められた。ハードの整備とともに、2009 年には水都大阪再生のシンボルとして「水都大阪 2009」というイベントが開催された。ソフト面の充実を図るため、舟運の活性化やアートを導入し様々なプログラムなどが企画実施され、河川、公園に目を向けるきっかけをつくったのである。また並行して、水辺周辺地域の協議会がいくつか設立され、河川空間を利用した「北浜テラス」という川床など、民間主導の活動も展開され、河川占用許可準則の緩和など、水辺を利用するための規制緩和への取り組みが実現されてきたのである。

３．「水辺の使いこなし」からはじめるまちづくり

2011 年からは、「水都大阪 2009」での経験を活かし、日常生活ににぎわいを広げ、水辺や公園の使いこなしを多様で魅力あるものにするための試みがはじまった。新たな水辺の使いこなしを実現すべく、社会実験、規制緩和を試みつつ、市民からの提案、活動をできる限り結集させた。「水都大阪フェス水辺のまちあそび」と銘打って、水辺を楽しく使いこなすこと、その楽しみをお互いが共有すること、そして、まちに愛着と誇りをもつことをテーマに、水辺に大阪の使いこなしを一堂に会したのである。

水辺を使いこなす子どもワークショップ

ヨガや演劇、子供とのワークショップなどの日常のまちづくりの活動、新たな水辺のプログラムとして様々なテーマのピクニックや水上散歩など、また、まちをつなぐ水辺バルやコミュニティサイクルなどなど、1 週間で 120 を超えるプログラムが展開された。また、おおさかカンヴァス構想との連動により、アートによって新たな公園、河川へのアプローチの姿を共有できることにもなったのである。のべ 30 万人の人がそれぞれの楽しみ方を共有する中で、水辺を再評価し、生活の舞台として認識してもらう出会いの場がうみだせたのである。

イベント実施にあたっては、イベントを含む都市をプロデュースする組織を将来的に展望するため、運営面でもコミュニティーデザインを充実させ、サポーターとの協働、教育のシステムも構築している。より多くのステークホルダーが連携しながら運営するしくみ、「大きなまちづくり」と「小さなまちづくり」を連動させる体制づくりの社会実験であり、連携をする新しいプラットフォームづくりを模索してきたのである。大阪市、大阪府、経済界が一丸となって、「水都大阪　光と水のまちづくり構想」をとりまとめ、そこにうたわれた目標である、まちに愛着と誇りを持つシビックプライドの向上、滞在型観光集客、経済活性化も視野に入れて、水辺を生かした民間投資やビジネスモデルの構築、新たな観光拠点の創出なども視野に入れた試みとしている。

イベント（水都大阪フェス）の風景

４．水都大阪パートナーズの試み

これらの経緯を踏まえて、2013 年 5 月に一般社団法人水都大阪パートナーズが設立され、都市デザインを含めてまちづくりを具現化する次のステージへと進んでいる。

市長、知事、大阪商工会議所、関西経済連合会、関西経済同友会を中心に組織されている、水と光の推進会議のもとに、プロポーザルで選定されたパートナーズと府市関係部局で構成されているオーソリティーズが連携して、一体的な実施をめざしている。

ここで求められているのは、①まちに愛着と誇りを持つ、シビックプライドキャンペーンを展開する強固な主体となること。②河川、公園都市等の管理権限を越えた一体的運用と規制緩和。③それらと関係付けられながら実感できる都市空間の整備を迅速に行える事業主体となること。④エリアコミュニティによる BID 等のエリアマネジメントと連動した都市経営を遂行できる環境をつくることである。

現在、公園や河川の未利用地、また、船着き場の連携を提案し、一体的な運営をめざして行動している。2015 年に計画されているシンボルイヤーを一つの節目として、世界に発信できるイベント、プロモーションを含めて展開する必要があり、より多くの地域や企業と連携したエリアマネジメントの設立をめざしている。

これらのまちづくりが、本来、公共空間が持つべき、時代と共に変遷しながら人々の記憶と欲求を受け止める場になり、新たな人々がクリエイティブに関わりながら未来をイメージできる場となることを願う。

隅田川に朝な夕な「川遊び人」が集まる５つの仕掛け

久米　信行
一般社団法人墨田区観光協会 理事・東京商工会議所墨田支部 副会長

１．はじめに－江戸の川遊びを取り戻せ

北斎や広重の浮世絵を見れば、なんだか隅田川の川辺は楽しそう。両国橋を渡ったら何かが起きそう。ハラハラどきどき楽しそう。

昭和３８年生まれの私は、首都高に覆われた隅田川や、今にもヘドラが登場しそうな隅田川を見て育ちました。だから川には近づきませんでした。
でも、大人になって、ジョギングやサイクリングをしてみたら、なんとも楽しい。下から船で上から車で見てみたら、意外なほど美しいのです。
きっと！もっと！川辺は楽しくできるはず。

隅田川発自転車ツアーに国籍 年齢 職業 性別を超えて集う！

２．川辺を憩いと再生の場にしたい

川辺に行けば誰かに会えて楽しい。元気になる。

いつの間にか、東京下町の路地裏からは、子供たちやジジババの人影が無くなり、笑い声も消えてしまいました。河岸と同様に、人々の暮らしも、コンクリートに塗り固められてしまったのです。
そんな潤いのない息が詰まる暮らしを一新する力が、実は、川辺にはあるのです。

自然におしゃれな人楽しい人が集まる「磁力」
新しいコミュニティが発生する復活する「結束力」
川辺から街が美しく楽しく変わっていく「伝播力」

この３つの力を使えば､朝から晩まで､スキあらば､川に行きたくなるような人が増えるはず。

３．「川遊び人」が増える集まる５つの仕掛け

そこで、５つほど楽しい案を考えてみました。
いずれも、次の条件を満たすことが前提です。

＞公的資金に頼らずビジネスベースで継続可能
＞受益者自身がお金を喜んで払い参加したくなる
＞地産品販売や観光集客につながる地域ビジネス
＞その営み自体が川の新しい賑わいと美景を作る
＞規制緩和と運営母体設計のモデルは全国展開可

まずは隅田川で実現してから、この楽しいバリエーションを、全国に広げて行きたいのです。

１）「自転車ツーキニスト船」「通勤ランナー船」
毎日の通勤が楽しくなる船の定期運行

スカイツリーを見ながら船＆自転車・ランニング通勤したい！

まずは、おしゃれで知的で多職種多様な粋人に、川辺の楽しさを再発見してもらいましょう。できれば、川辺に住んだり働いたりしてもらいたい。
そのためには、自転車ツーキニストや通勤ランナーに川遊び通勤をしてもらうのが一番。自宅から最寄り

の船着き場にRIDE or RUN。船に乗って東京湾や隅田川を巡ります。自転車も積みますので、フラットスペース。自転車乗りやランナーゆえ屋根さえ要りません。全員、立ち乗りでもいいですし、空いていればゴザや折畳みベンチを広げてもいいですね。船の上では、同好異職の乗船者と毎日顔を合わせるうちに仲良しに。川景色を楽しみながら、おにぎりや珈琲を楽しむピクニック的通勤です。通勤地獄が通勤天国に変わります。

前払い定期券制にすれば、観光船と違って収益計算も楽です。まさに受益者負担の新ビジネス。お役所は、規制緩和と許認可、駐船の問題さえ解決してくれれば、補助金無しで実現可能でしょう。

２）昼は「ピクニック船」夜は「エンタメ船」
使い道自由の貸切スペースで通勤船有効活用

せっかくの屋根無しフラットスペースの通勤船ですから、通勤時間以外は有効活用をしたいもの。そこで、楽しい貸切り利用を考えます。

昼なら、貸切でピクニック気分のクルーズが楽しいでしょう。なにせオープンエアですから遊覧船や屋形船より面白い。そこで楽しそうにしている姿を、川辺の人が見れば、マネをしたくなる。
粋な旦那衆や会社の接待なら、向島の芸者さんや浅草の大道芸人などと同乗して欲しいもの。それを見ているのも楽しいですね。

夜は夜で、ストリートミュージシャンやパフォーマーに、エンタメ船を安く貸しましょう。自転車通勤船でペイしているので、燃料を使わなければ、丸儲け。毎晩、川辺のジャズフェスティバル、大道芸フェスティバルなんて楽しくないですか。散歩する人やジョガーも足をとめて腰掛けて笑う。川辺のカフェだって繁盛するはずです。

お役所の太っ腹な許認可に加えて、近隣のモンスター住人の文句封じ＝私権の制限も課題です。しかし、川辺が人気スポットになって羨ましがられて価値が上がることや、特別待遇のご招待などの特典との合わせ技で解決できるでしょう。

３）川辺を市民に解放「レンタルMYガーデン」
毎日わたしの庭じまん。美しい花と満面の笑顔

見て美しく歩いて楽しい川辺には花と緑が欠かせません。しかし、お役所まかせだと管理優先の無粋で均一な植栽になりがち。お金もかかります。

しかし、東京下町は、自宅前の道まで勝手に花で飾ってしまうゲリラガーデニングの聖地。このシニア女子のエネルギーと情熱を、川辺に生かすのです。どこでも大人気の市民農園の「花壇」版、「レンタル MYガーデン」を川辺に展開します。全体の統一感を出すために、ガーデンアーキテクトの指導と、テーマフラワーの種や株分けを行い、その上で、自由自在に花壇を育ててもらいます。花壇がムリなら堤防の壁かけのコンテナでも良し。

多くの方々に見てもらえるとあらば生き甲斐に。適度な競争意識で、美しさを競い合い、毎日、自分のお庭に足を運ぶでしょう。道行く人たちと話もはずめば、サロン代わりに病院に通うシニアも減って、元気になるはず。（社会保障費も減る？）

更新条件は、美しく管理できたかどうか。コンテストを開催しても楽しくて盛り上がりそう。

実現には、花壇の整備に加えて、水やりの水道の整備や、ライトアップ照明用の電源が必要です。可能なら雨水や太陽光・風力発電と組み合わせたい。お役所は、緑のために支出する代わりに、収入が入るのですから、それを見込んで投資します。

４）「日の出・日の入」堤防ベンチとカレンダー
毎日、朝日と夕陽を眺める憩いの場

アンコールワットのように隅田川で毎朝晩おひさまを楽しむ！

アンコールワットの前の水辺には、毎朝、日の出を見ようと世界中から来た観光客で賑わいます。夕焼け時にも、お壕端に腰掛ける人が並びます。

隅田川沿いにもスカイツリー越しの朝日など、季節毎に美しく見えるビューポイントがあるはず。そんな「日の出･日の入絶景ポイント」をいくつも探します。そして堤防の上に「冬至、春秋分、夏至の最適地点」をペイントします。そうすれば鑑賞のための絶好のベ

ンチ代わりになるでしょう。毎日おすすめの場所と時間がわかる web サイトやアプリを作れば、そこを目がけて続々と人が集まってくるはずです。毎朝と夕に、国籍を越えて老若男女が堤防に腰掛けて、お日様をお迎えお見送りをする。素敵な川辺の風景だと思いません？

ただし、落ちたら自己責任。仮に死傷者が出ても、この美しい仕組みは変えないようにします。

もちろん、絶景ポイントの周りには、カフェや居酒屋ができて繁盛することでしょう。

５）毎年恒例！首都高マラソン&サイクリング
朝から晩まで 30 分おきにスタート

首都高の上で東京アースデイ自転車ライドや東京マラソンを！

オリンピックは 50 年に１度開催できるかどうか。しかも市民参加で楽しむものではありません。

ところが、首都高マラソンとサイクリングなら、年に１回でも２回でも実施できます。東京の水辺でしか味わえない絶景と快感。この特別な体験は、世界の名物になる魅力十分です。

三環状線が、開通した時点で、年に１ー２日、首都高の都心環状線と湾岸線の一部を封鎖します。
スタートは、首都高向島線ガード下、隅田公園下の約２キロの道路。墨田区役所前で受付をして、参加費 x 千円で時間帯別にエントリーした人たちが集まり、３０分おきに出発します。

向島下り入口から隅田川を左に見ながら北上する
＞小菅ジャンクション右折。荒川を右に見て南下
＞ディズニーランドと観覧車を見て湾岸線を右折
＞お台場の観覧車に向かって湾岸線を西に行き
＞レインボーブリッジを東京タワー見ながら渡る
＞浜崎橋ジャンクション左折して環状線外回り
＞東京タワーを右手に見ながら谷町を右折
＞トンネルをくぐり抜けて千鳥ヶ淵へ
＞大手町を抜けて箱崎ジャンクションから両国へ
＞東京スカイツリーを見ながら隅田川北上
＞駒形ジャンクションを降り墨田区役所でゴール

その後は、もちろん川遊び。川辺には、日本中の美味しいものを食べられるように、４７都道府県のアンテナショップの出店を並べましょう。

自転車や人の輸送には、遊覧船だけではなく、通勤船もフル稼働。首都高の前から楽しんだ隅田川を、そして世界の首都東京を、今度は船の上から楽しむのです。

首都高の上なら大げさな警備や、信号管理も不要ですし、事故は自己責任で参加者に一筆書いてもらいましょう。それでも、世界中から参加希望者が殺到するはずです。（私なら、朝一番と夜に走りたい）

いずれも、国土交通省、東京都が本気になれば、その道の専門家がタスクフォースを作れば、お金も時間もかけずに即実現できそうなものばかり。ということは、今回集まった「水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会のメンバーが本気になれば、実現できるということです。ぜひ 2020 年の東京オリンピックイヤーまで待たずに、どんどん実現させてしまいましょう！

川は都市のデザイン資産である

紫牟田　伸子
編集者・デザインジャーナリスト／紫牟田伸子事務所代表

１．都市の資産としての川辺

川は都市の風景にとって、大きな意味をもっています。川は目の前が開かれた空間なので、まちなみがふと開けるところが川辺です。川辺の特徴は、水という自然と人口構造物が溶け合う風景だと思います。川という自然の産物が、人がつくりだしたさまざまな工夫とともにあることが、世界のそれぞれの都市の川辺を独特のものにしているように思います。川はどこでも同じ姿ではありません。地形や都市のつくられ方とともに都市の中に存在しているので、川は都市イメージの形成に大きな役割を果たすと同時に、その川とのつきあい方に文化や都市のセンスのようなものが見えています。

水上には船や艀などが浮かび、護岸や橋、対岸の遊歩道、水門、道路、倉庫や工場、造船所や住宅などが一体となって風景をつくりだしています。川は昔から交通路としても使われ続けていたため、川の周辺には、みどりもあれば、工場や倉庫もあります。川は都市の形成に大きな役割を果たし、産業の発達にも寄与してきましたが、同時に、都市の風景としての魅力づくりを意図しながらつくられてきた都市とそうではない都市では、都市の魅力に大きな差が生まれているように思えます。

フランスのボルドーを訪れたとき、まちなかを豊かな水量をたたえて滔々と流れるガロンヌ川の迫力に驚きました。旧市街から川に出ていくと、対岸の新市街側にある緑地が美しく見えます。東側の再開発地域である新市街には緑地帯がつくられ、この地域の植生を入念に調べてランドスケープデザインされた公園があります。西側の旧市街は古い建物を望むことができます。川辺をトラムが走り、車窓から東西で異なるまちの風情を見ることができます。旧市街側の川辺は歩いていくとさまざまに風景が変わります。トラムと歩道が並行して走る川辺、暖かくなると市民が水遊びをしにくる広い噴水の広場、石畳の歩道と広場が一体となった空間、造船工場跡を利用した巨大なギャラリーやレストランなど。

ボルドーのまちなみ

ハンブルグに住んでいたとき、休日ともなれば川辺を散策したり、おしゃべりをしたり、鮮魚市に集まったりする市民や船でエルベ観光をする観光客など、川は人々が集まる場所であることを知りました。

ロンドンやパリでも同様に、都市はつねに川を向いており、人々は川辺で思い思いの時間を過ごしているのです。ヨーロッパのどの都市においても、川は市民にとっての大切なパブリックスペースであり、コミュニティスペースです。同時に、そうした市民が楽しむスペースであることが、観光客をもひきつけているということがわかります。

Picnopolis Newcastle/Gateshead
（ピクニック都市 ﾆｭｰｷｬｯｽﾙ/ｹﾞｲﾂﾍｯﾄﾞ）
ミレニアムブリッジ

２．デザイン資産としての水辺のものたち

都市の川辺は自然と産業が共存していることに魅力のひとつがあります。歴史的に見ても、川は人の暮らしを支える交易と、それにともなう商業と産業が多様に集積してきました。産業の変遷とともに、姿を変えていく建物は、ヨーロッパの川沿いに数々生まれています。ロンドンのテムズ川沿いの旧発電所を現代美術館にしたテイト・モダンや、小麦倉庫を改装したゲイツヘッド市のバルティック現代美術館などはその事例です。

さらに、橋という構造物も川の風景に大きな役割を果たしています。先に述べたゲイツヘッド市の対岸は、ニューキャッスル・アポン・タイン市で、かつては双方ともに造船業が盛んで、競い合う間柄でしたが、産業が衰退した現在、川は両市を結ぶ文化エリアに生まれ変わりました。その象徴が跳ね橋です。船が通るために跳ね橋があがる際には、多くの人々がその時間を見に集まってきます。跳ね橋を見られる場所にはカフェもあり、対岸のバルティック現代美術館からも見ることができます。こうした人工物のデザインもまた、都市の川岸にとって、都市の魅力をつくりだす、重要な要素だと感じます。

行き交う船、対岸の護岸、水門など、いわゆる土木のデザインが人に与える印象を大きく左右するものが川辺です。橋の上のベンチや川辺のベンチで待ち合わせをしたり、語り合ったり、本を読んだり、という風景が、日本ではほとんど見られないのは残念です。

３．川辺は人とコミュニケートできているか？

日本語でいう「公共空間」は、「誰のものでもある」ことを意図するあまり「誰のものでもなくなっている」ということが、この懇談会でも話題に上りました。公共の空間だけでなく、現代のデザインは、商業的になるあまり、イメージを訴求することにのみ力を注いでいるような感じを受けます。川辺をデザインするためには、川辺と人の交わりをデザインしていかなければなりません。「デザイン」は表面の姿かたちを変えることを意味するものではありません。なんらかのかたちが出てくるためには、そのものの存在の意味がかたちになっていなければ、デザインには意味がありません。川辺でいえば、川辺の空間がみんなのものであり、自分も大切にしたいという気持ちを育んでいくようにデザインしていくことがいちばん大事なことです。

水辺は人が創造的になれる場所です。そして人の想像力を育みます。そんな水辺ならば、日本の都市の魅力を増すものになると思っています。

水都大阪の取り組みについて

田中　義宏
大阪府　都市整備部　技監

１．はじめに

平成１３年、国の第３次都市再生プロジェクト決定を受け、国、府、市、経済界のオール大阪で、「水都大阪」の再生に取り組み、今年で１４年目になります。水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会では、水都大阪の取り組みを先進事例として取り上げていただきましたことから、これまでの事業経過について、ご説明させていただきたいと思います。

２．事業経過（水都大阪２００９以前）

オール大阪の関係機関で構成される協議会において、水都大阪の目指すべき将来像などを議論し、「水の都大阪再生構想」を策定しました。この構想に基づき、大川や堂島川では、同時期に実施されていた京阪中之島線の鉄道工事の復旧に合わせ、水辺の拠点となる八軒家浜や中之島公園の再整備を行うこととし、平成２１年には本体の鉄道工事とともに完成をいたしました。

そこで、シンボルイベントとして開催されたのが水都大阪２００９です。開催期間５２日間に１９０万人ものひとが、水辺に訪れ、水辺の楽しさを体験していただきました。また、この年には、社会実験による河川占用の規制緩和を活用し、大川や中之島公園の水と緑を感じながら食事を楽しむことができるリバースイート大阪（川の駅はちけんや内）、大阪北浜テラスなどの飲食店舗が営業を開始しています。

３．事業経過（水都大阪２００９以後）

水都大阪フェス２００９後には、その気運を継続・継承するため、「水都大阪推進委員会」が設立され、その事務局には官民からの人材が集められました。この官民合同チームの事務局により、平成２３年、「水の都大阪再生構想」の後継として、今後の進むべき方向や目標を定めた「水都大阪水と光のまちづくり構想」が取りまとめられました。この構想は、「水」に加え、「光」のまちづくりを合わせ、ハード整備とともに、イベント、プロモーション、ブランド構築などソフト施策を盛り込んだものとなっています。

この構想に基づき、河川管理者が、水辺の拠点をつなぎ回遊性を高める遊歩道や船着き場の整備を進めるとともに、橋梁や護岸のライトアップにより夜間景観の向上に取り組み、水都大阪推進委員会が、水都大阪の魅力を発信するホームページの開設や季節ごとでイベントを開催するなど、ソフト・ハードの両輪で事業を展開してまいりました。さらに、平成２５年度からは、府、市、経済界のトップによる「水と光のまちづくり推進会議」を決定機関とし、執行機関には、公募により選定された民間組織「水都大阪パートナーズ」、水辺空間の活用に関する行政の一元的な窓口として「水と光のまちづくり支援本部（水都大阪オーソリティ）」（大阪府・大阪市の合同事務局）を設置し、推進体制の強化を図りました。

	推 進 体 制 （Ｈ２５年度～）	備　考
決定機関	**水と光のまちづくり推進会議** 構成員 大阪府知事、大阪市長、大阪商工会議所会頭 関西経済連合会会長、関西経済同友会代表幹事 大阪府市都市魅力戦略推進会議会長 推進会議の設置 **アドバイザリーボード(専門助言機関)** 企業家、学識経験者、ジャーナリスト 基本方針の提示 事業評価の実施　等 助言等を実施	◇水と光のまちづくりに関する取り組みの基本方針の策定 ◇水都大阪パートナーズの運営者の選定 ◇水都大阪パートナーズの事業の支援、事業評価
執行機関	**水都大阪パートナーズ** 国内外の豊富なビジネス経験を有する方や、水都大阪2009以降、常に水都大阪の取り組みに携わっている方など、多岐にわたるノウハウ・経験を有する斬新な運営メンバーで構成 【事業内容】 ・新たなシンボル空間創造、エリアマネジメントの推進　（BID手法の活用等） ・水辺の賑わいづくり(水都フェス等)・社会実験の推進 ・水と光の首都大阪のブランドイメージ発信 ※水都大阪パートナーズ：H25公募により選定した民間組織 複数年（４年）の運営を前提としているが、実績評価は毎年実施する。 府・市・経済界が一体となり 取り組みを支援	◇民主導の水都事業推進組織 ◇プロ人材が運営に参画 ◇収益事業も積極的に展開（自ら稼ぐ） ◇評価システムを導入（PDCAの徹底） ◇基本的な人、モノ、資金は、府・市・経済界が支援
行政・経済界の関わり方	**≪行　政≫　水と光のまちづくり支援本部（水都大阪オーソリティ）を設置（H25）** ⇒　水辺空間の活用に関する行政の一元的な窓口　（府市合同の事務局） **≪経済界≫　水都大阪パートナーズに対し人的・物的支援を展開（H25実績　２人配置）**	◇水と光に関わる民間活動を府・市・経済界が強力に支援

このように、水都大阪では、事業進捗に応じて、ハードとソフトを連動させ、組織体制の見直しを行いながら事業を進めています。

４．今後の取り組みについて

水辺の拠点や船着き場の整備、ライトアップ、規制緩和による民間事業者の誘致は、それ自体が目的ではなく、達成するための手段の一つです。「水都大阪　水と光のまちづくり構想」では、「大阪の都市力の向上」を最終目標に掲げて、水辺の賑わいを沿川の建物、まちへと広げ、シビックプライドを育み、戦略的なプロモーションにより、水都大阪ブランドの確立を図るとしています。

これらを実現するためには、地域住民、ＮＰＯ、企業等を含めた民間との連携が、ますます重要になってまいります。そのためには、組織体制だけでなく、民間の熱い思いをしっかりと受け止め、一緒に議論し考える職員の必要性が、ますます高まってくると感じています。

水辺を「拓く」ために

辻田　昌弘
三井不動産株式会社　Ｓ＆Ｅ総合研究所長

人を拒絶する水辺

「背水の陣」という言葉があるように、大多数の人は海や河川や湖沼のほとり（水辺）まで来ると、そこから先へは進めないと考える。つまり、水辺というのは行き止まりの袋小路のようなものだ。もしもその袋小路のどんづまりに何もないことがわかっていたら、誰もわざわざその袋小路に入ってみようとは思わないだろう。

もちろん実際には、水辺には何もない、というわけではない。言うまでもなく、水辺は本来はさまざまな魅力に満ち溢れた場所なのだ。水面を渡る風は心地よく、揺れる水面は陽光や周囲の景色を映しこんで輝き、刻々とその表情を変えていく。釣りやマリンスポーツなどの趣味に興じる人もいれば、そぞろ歩きを楽しむ人もいるだろう。水辺にレストランやカフェがあればついつい入りたくなってしまうし、京都の鴨川のように、水辺はデートスポットとしても定番中の定番である。

しかし、少なくとも東京、特にその都心部においては、残念ながら水辺はそうした魅力に富んだ場所として人々に広く認知されているとはいいがたい。例えば、隅田川沿いの駒形橋のたもとから厩橋のたもとにかけて、住所で言えば駒形二丁目あたり。江戸通りと隅田川の間を隅田川と平行して走る路地が一筋あるのだが、この路地と隅田川の間には建物が連なり、さらにその先には人の背丈を越えるほどの無機質な防潮堤がそびえ立っているため、この路地を歩いても、すぐそばに隅田川が流れているとはほとんどの人は気づかないだろう。

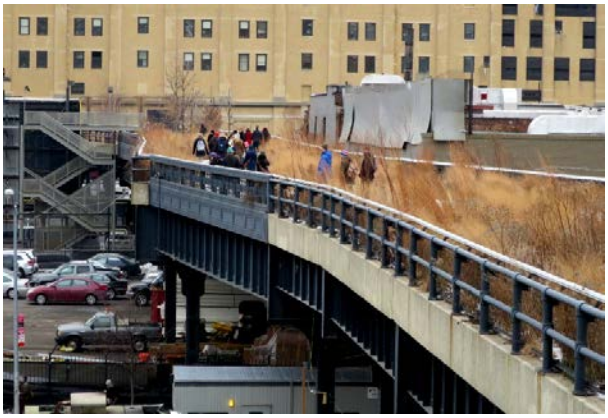
もちろん、その防潮堤の向こう側、隅田川の川岸沿いには、目の前にスカイツリーを眺めることができる遊歩道が整備されている。しかし、この遊歩道に下りるための通路は駒形橋と厩橋のたもとにあるだけだ。その間約 500m。仮にその路地を歩く人が、すぐそばを隅田川が流れていることに気づいたとしても、気楽に「じゃあ川岸の遊歩道を散歩でもしてみよう」というわけにはいかないのだ。

もちろん、防潮堤は防災上必要欠くべからざるものであることはよく理解している。しかし、とはいえ、その無機質なフォルムは、安全対策のために張り巡らされている鉄柵と一体となって、あえて水辺に近づこうという気持ちを萎えさせるに十分な負のオーラを無言のうちに発している。そのせいかどうか、せっかくきれいに整備された遊歩道を歩く人の姿はまばらであるように見受けられる。都内の水辺のすべてがそうだとは言えないが、典型的にはこの駒形二丁目界隈の風景は、水辺の魅力どころか、むしろ水辺が人々が近づくことを拒絶しているかのようにすら感じられる。

日常の風景に埋没する水辺

話は変わるが、アメリカはニューヨークの新名所、ハイラインをご存知だろうか。これは 1980 年以来使われないまま放置されていた高架の貨物鉄道線を遊歩道として再生したもので、オープン後２年間で 400 万人を超える人が訪れたという。この再生を主導した NPO の設立者のひとり、ジョシュア・デイヴィッドは、廃線のまま放置されていた往時のハイラインについてこう述懐している。

「これまで何万回と通り過ぎていながら、こんなところがあることに気づかなかった。見慣れた日常の風景にすっかり隠れていたからだ。」



東京の河川というのも、印象としてはおおむねこんな感じではないだろうか。

鉄道や自動車が発明される以前、物流の主役は船舶、すなわち水運であった。現在の東京は江戸時代におい

て既に人口 100 万人を擁し、世界有数の巨大都市であったといわれるが、水運はその膨大な人口を支える重要な物流インフラであり、そのため江戸市内には河川や掘割・運河が縦横に張り巡らされていた。明治以降に埋め立てられたり暗渠化されたものも少なくないが、それでも東京にはまだまだ多くの水辺が残っている。

しかし、そうした水辺の存在それ自体が人々の意識の端にのぼることは少なくなっている。クルマや徒歩で水路にかけられた橋を渡るときでさえ、その足下に水路が流れていることに気づかない人も少なくないのではないだろうか。

閉ざされた公共空間としての水辺

なぜ水辺が人々の意識から締め出されているのか。それは、逆説的な言い方になるが、水辺が公共空間だからである。河川敷は原則として国や自治体など公的セクターが維持・管理する。その意味で公共空間である。しかし、公的セクターが河川敷を維持・管理する際に念頭に置いているのは、まずは防災や安全といった観点であり、人々の利用という観点は優先順位としてはそれより低い地位に置かれている。

しかも、防災や安全という観点と人々の利用という観点は、両立しない場合が少なくない。防災や安全のためには水辺を人々に利用させないのがてっとりばやいからだ。日本の水辺が人々の接近を拒絶しているかのような雰囲気を漂わせているのは、けっして偶然ではないのだ。

しかし、本来公共空間は人々に開かれたものであるべきだ。もちろん、防災や安全に十分な手立てを講じるのは公的セクターの責務である。しかし、そのことが直ちに人々の利用を排除するということにはつながらないはずである。むしろ、維持・管理と人々の利用を両立させるように意を砕くことこそが、公的セクターに期待されているのである。

水辺の魅力再発見に向けて

例えば防潮堤である。下・左の写真のように、隅田川の遊歩道では防潮堤にこのように煉瓦を貼り、遊歩道には植栽を施すといった修景工事が進められている。しかし、せっかく予算をかけて事業を進めている東京都の方には申し訳ないのだが、正直言って楽しくない。なんだか刑務所の塀のようだと言ったら辛辣にすぎるだろうか。

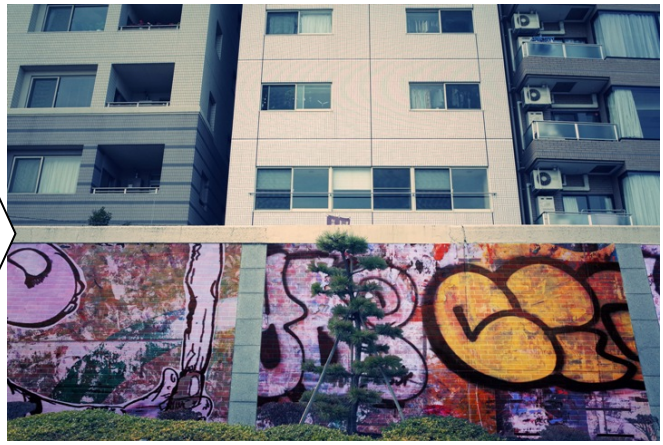
どうせなら下・右の写真のように、この壁面を巨大なキャンパスに見立てて有名アーティストに絵でも描いてもらったらいいのではないか。有名アーティストにお願いする予算がないのなら、無名のアーティスト達に公募をかけて３カ月とか半年ごとに描きかえさせてもいいだろう。そうすれば行くたびに新しい作品が見られるということで足を運ぶ人も増えるかもしれない。あるいは、地元の小学校などに卒業制作の場として開放するという手もあるだろう。自分たちが力を合わせて描いた作品の前に集まって同窓会を開くなんて、けっこう素敵だと思うのだけれど。

これらはほんの思いつきのアイデアだが、冒頭にも述べたように袋小路のどんづまりに何もなければ人はわざわざ足を運ばない。だったら、人が足を運ぶような仕掛けをすればよいだけのことだ。水辺には本来それだけの魅力があるのだから。

そして、やや乱暴に言ってしまえば、それは管理主体である公的セクターの意識改革次第でどうにでもなるのである。現に同じ自治体であっても、水辺の利用について先進的なところとそうでないところの差が、このところ顕著に見え始めている。水辺の魅力の向上に向けた自治体間競争が始まっていると言ってもよいだろう。こうした切磋琢磨を通じて水辺が再発見され、その魅力が向上していくことを人々はおおいに期待しているのだ。

［参考文献］ジョシュア・デイヴィッド、ロバート・ハモンド著(2013)『HIGH LINE』アメリカン・ブック＆シネマ刊

ビフォー



アフター（イメージ）

空間としての川

遠山　正道
株式会社スマイルズ　代表取締役社長

私は飲食や小売りをやっているので、そういう生活者の視点からしか水辺を語ることができない。
ある日、早稲田駅の裏のわずか３坪の繁盛店ワインバーに行った。
予約がとれたのは夕方の５：３０から。
駅から歩くと繁華街を抜け、住宅街に入る。こんなところ？という人通りのない川沿いにその店はあった。
オーナーになんでこんな場所？と聞くと、瞬時にこの前面の抜け感、と返ってきた。店の前は川なので、上空が、視界が開けているのである。だから、ファサードはガラスだけで構成されておりサインすら極小である。店のなかでこのガラスが一番お金がかかっていると彼は自嘲気味に自慢した。この店は、店主の魅力、ワインの品揃えなどなどが勿論優れているのだが、店を一番決定づけているのは「川の前という魅力的な立地」なのである。
あえて言うなら、その川の手すりが勿体ない。
いかにも公共物でありますと語っているような、アルミの焼付け。もしこれが、木製か錆止め塗料や、或いはツツジにでも覆われていたら、ワインもさらに美味いことだろう。
公共は、同じお金をかけるならば、単に安全性だけではない、借景としての川、人が集まる場としての川縁などをもっと意識して頂きたい。

＊

私がいま文章を書いているのはオフィスのデスク。
この机は窓際にあり、目黒川に面した２階である。
このオフィスの移転に際して気をつけたのは、緑の借景があって、風が抜けること。
目黒川の桜並木に面した緑のある好立地だが、天井が高く、窓も高い位置にあった。折角の並木が目に入りづらい。
だから、床を 60 センチあげて、窓から桜を見下ろせるようにした。
私が今右に目をやると、冬の桜の枝越しに目黒川の水面がチロチロと流れて心がなごむ。
目黒川の桜が見事なのは説明はいらないが、私はどちらかといえば、季節後半の花弁が散って、水面にギッシリと白い花弁が渦を巻きながら悠々と流れていく姿が強く印象に残っている。
これは単なる思いつきだが「みなも祭り」なんてのはどうだろうか。
標高の高い川から、大量の花弁的なものを流す。
その花弁は最終的には水に溶けてバクテリアにでもなって川の生態系を活性化させる役割もある。その花弁が、都会の川にまで流れてくる。下流でも色の違う花弁を流す。
花弁が覆う水面に思いをはせる、誠に静かな祭りである。

目黒川と八重桜

＊

川が空間の広がりであり、借景ならば、借景の意識をもっと高めることも一手である。
例えば、自分の家の裏には川が流れているとする。家と川には狭小なスペースしかない。しかし、対岸から見れば川の景色である。ならば、対岸の人のために家の裏の狭小スペースに樹木を植える、夜はライトアップする、そのような対面の人のために施すことに対して「川辺借景基金」などを施行してはどうだろうか。今までお金を生む場所ではなかったものが、対岸の人のために手を入れることでお金が生まれるならば。何より川の向こうの人のために何かを施す、という精神は何か江戸情緒などすら感じる。

＊

水辺という空間の広がりは、今まで背を向けていたわれわれにとって、ひとつのチャンスかもしれない。皆のために出来ることで、何かが、街が、人が変わっていく。豊かな生活が立ち上がる。そんな風景が現れることを期待する。